

独自コンテンツや既存ソフトを駆使し、履修後も持続可能な発音学習法を身につける

外国語学習において、発音の練習やその評価はネイティブ教員に依存する傾向にあるが、十分なフィードバックを行うには対応するマンパワーが不足しがちだ。留学生を対象に日本語発音の授業を担当する木下准教授は、各種のWeb教材を活用し、学生が自らの発音の問題点を見つけ、伝わりやすさやわかりやすい発音を自分で学べる仕組みを構築し、大きな学習効果をあげている。



木下 直子
日本語教育研究センター 准教授



増加するニーズに応えるため、自律学習支援用コンテンツを制作

2018年度現在、早稲田の日本語教育研究センターでは約2500人程度の留学生が日本語を勉強している。その中でも発音の授業は非常に人気が高く、定員超過で抽選になることも少なくないという。

この授業は日本語の初級後半から中級の学習者を対象にしたもので、初歩的な語彙や文法などを習得した学生が、より伝わりやすい発音を身につけることを目指している。「ネイティブのように話せるようになりたいという学生は多いのですが、彼らの母国でも日本でも、発音に特化して勉強できる機会はほとんどないのが現状です。早稲田には初級から上級までの発音クラスが揃っているため、ぜひその授業を受けたいという要望は多いようです」。

こうしたニーズは今後も増加することが予想される一方で、発音を専門とする教員は限られており、十分対応できる人材を揃えることはむずかしい。そこで、学生自身の自律学習支援用に開発されたのが、「つたえるはつおん」というWeb教材だ (<http://www.japanese-pronunciation.com/>)。開発には木下准教授自身が代表となり、同センターでの教員経験者や、日本語教育の講師経験もあるWebデザイナーなど4人が共同で企画に携わった。

柱となるコンテンツは、状況に適した音声を選択するクイズだ。4コマ漫画で状況を説明し、間違いやすい2種類の音声から選択すると、即座に正解が表示される。そこにはイントネーションやアクセント、リズムなど5つの音声項目を扱う要素が埋め込まれており、学生はこのクイズに答えることで自分の苦手なものを確認できるようになっている。項目ごとに練習問題があるだけでなく、自分で練習する方法を解説する動画も用意されている。「これは学習用の教材ではなく「学び方を学ぶ」ためのコンテンツです。これを使って自分の目標を立て、どうやって勉強するかを学ぶのに役立ててもらいます」。

自らの弱点を知り、自分にあった学習法を見つけよう

この授業における教育理念は、授業を履修し終わった後も、自分で継続して発音を勉強できるようにすることにある。そのためにもまず、日本語を使って何ができるようになりたいのかという自分なりのゴールを設定し、そこに到達するにはどの程度の発音の正確さが求められるのかを考えさせ、自ら学習プランを描くように指導している。

そもそも日本語教育研究センターでは、各授業に初級、中級、上級というレベル設定はしているものの、どのレベルの授業を受けるかは各学生に委ねている。「読み書きは得意だが会話は苦手、逆に会話はできるが漢字は書けないなど、そのスキルは多様で一律には測れません。各自、オリエンテーションに参加して、自分の状況や目標に合わせて選んでもらっています」。

授業では、現在苦手の発音や練習したい発音はどんなものかを自覚させた上で、自分に最適な学習方法を見つけよう。「たとえば、同じリズムを学ぶにしてもいろいろなアプローチがあります。手を動かして学ぶと感覚がつかみやすい人、ビジュアル化された説明を目で見るのが分かりやすい人、あるいはシャドーイングなど耳だけで訓練するほうがいい人など、つかみやすい感覚や勉強しやすいものは人それぞれです。多くの選択肢を提供し、各自の好みや得意不得意に応じて選んでもらうことで、15回の授業を通して、自分にとって持続可能な学習方法を見つけようという考えです」。

話したい言葉のモデル音声作成や発音の自己分析も可能に

正しく発音できているかどうかの確認は、自己評価、他者評価、学習ツールを用いた評価という3つの方法を導入している。「発音チェックはネイティブにやってもらうものと思いがちですが、母国に帰れば日本人は身近にいないかもしれないし、日本人であっても、アクセントを重視する人、イントネーションを気にする人など、人によって評価には揺れがあります。それに左右されて

しまうのも良くないので、自分ができるようになりたい発音を見定めて、それに向かって何をどうすればいいのかを自己分析できるようにしてほしいのです」。

発音のチェックにはpraatという音声分析ソフトを紹介している。言語学の研究者向けにつくられたもので、誰でも無料で利用できるようにWebで公開されている。モデルとなる音声や自分の発音した音声を読み込むと、アクセントやイントネーションなどが可視化され、客観的に比較分析することができる。耳で何回聞いても違いがよく分からないという学生も、ビジュアルに分析すると分かりやすくなる。

発音の練習用に用いるリソースは、自分が最近関心のあるものの、勉強しているものの中から探してきてもらうようにしている。「特に中級ともなると、少しは自分の意見も日本語で言えるようになってくる頃なので、日本語の世界もいろいろ広がってきています。そういう場で触れる関心のあるリソースを題材に練習するのが効果的だからです」。

自分で集めたリソースのお手本となる音声作成には、OJAD (Online Japanese Accent Dictionary) というサイトの「韻律読み上げチュータ スズキケン」 (<http://www.gavo.t.u-tokyo.ac.jp/ojad/phrasing>) を利用。PCの画面上で文章を入力すると、合成音声を再生できるだけでなく、ピッチパターンやアクセントなどを表示してくれる。学生は、自分が話したい言葉の正しい発音を、独力で調べて学ぶことができる。

さらに、授業内では自分で録音した音声をファイルでCourse N@viにアップロードさせている。公開レポートという形にすることで、教員だけでなく留学生同士で評価し合うところがポイントだ。「他の学生の発音を聞いて気づいたことを言語化することは、自分にとっても非常に勉強になります」。

これらの経験から、発音の学習においてこうしたICTの学習ツールを導入することには、大きなメリットがあると実感しているという。「発音というのは目に見えないもので、一瞬で消えてしまいますが、こうしたツールを使えばそれを記録することができます。メタ的に捉えられるというのは非常に重要で、何度でも繰り返して聞いたり、評価することもできるのは、とても効果的です」。

独自コンテンツは学外でも高い評価を獲得

「つたえるはつおん」は、2014年度の研究プロジェクトとして開発をスタートし、2015年度から実際の授業に利用している。導入当初の2015年度春学期に、指導前、1週間後、学期末の3回で同レベルのテストを行って見たところ、顕著な伸びが見られたという。学生からも「上達を実感できた」「ここで習った方法で、これからも勉強を続けていきたい」となどポジティブなコメントが多数寄せられている。「学生たちはドラマの音声などをオウム返しにリピートして練習することはできても、発音のルールがわからないと他の場面では応用ができません。この授業を通してルールをしっかり学んだ上で、自分が話したい言葉の発音を調べて勉強できるというのは大きいと思います」。

「つたえるはつおん」の開発では、学生に手軽に利用してもらうことを考え、画面レイアウトなどを工夫するだけでなく、できるだけエッセンスを絞って提示するなど、スマホで快適に利用できるようにも留意した。「ひとつ説明しだすと長くなってしまいがちなので、いかにシンプルに切り取るかは苦労しました」。

開発開始以来、随時改善を重ねてきた「つたえるはつおん」だが、今後は初級者や上級者などターゲットを広げること、さらには方言バージョンなども取り入れていきたいと考えている。一般にも公開しており、「学び方を学べる」希少な教材として高い評価を獲得し、国内外の多くの教育機関で広く利用されている。「海外だけでなく日本国内でも、自分の発音に自信がないのでどう教えていいかわからないという先生は多いようです。そうした状況でも、これを通してさまざまな学び方を紹介できたらいいと思います」。